ミカエル・プセロスの哲学小論集

「プラトンの語るイデアについて」（Περὶ τῶν ἰδεῶν ἃς ὁ Πλάτων λέγει）

私の尊敬し、深く愛する友よ、プラトンが提唱するタ・オンタ（諸存在）のイデアは、プラトンが誰か他の人から聞き知ったものであれプラトンが初めて見出し名づけたものであれ、彼自身がアウトゾーオン（自生者）と呼び慣らわしたノエート・コスモス（思惟的世界）である

これについては、すべての賢者たちの意見は一致している。しかし、それがいったい何であるのかについて考えた人は数少ないように思える

というのも、学識者として評判の高い人のなかでも、イデアを、何か思惟的なウーシアイ（実体）のような、デーミウールゴス（制作者）のエンテュメーマタ（思考）であると推定する人々の著作に遭遇したことがあるからである

彼らは、イデアがあたかも制作者の中心点から発せられる思惟的な線のようなものであると考え、これらの与えられた規範に従って、それらに向けてソーマテイコス・コスモス（物体的世界）が制作され、またそれらの父（制作者）がこの世界をもそれらイデアに似せたと考えるのである

なぜなら、神においては思考はある種のテュポイ（印影）やアニュポスタトス（実体のない）原理ではなく、ヒュパルクセイス（本質）であり、ウーシア（実体）だからである。すなわち、彼らはそこには結果的・偶発的なものは何もないと主張するのである

このように主張する人たちは、ト・パン（万物）の制作者を最初に置き、その次に制作者の第一の思考であるもろもろのイデアを、そしてその次に、天と地およびそのあいだにあるもので構成され、それらが統合されてできたこの世界を置く

すなわち、かしこで提示されているものは、純粋な、真の原型であり、他方、ここのものは、合成物、模造物であると言うのである

彼らはプラトンの意見をこのように解釈して語るわけだが、私には彼らがプラトンの教説の要点を把握しているとは思えない。今言ったことをより正確に言うならば、私は、私の意見を語るのではなく、これを最初に言った人の魂を除き見るかのようにして、他の人々よりも正確な解説を行ってみよう

プラトンは、この世界における物体のモルファイ（姿形）を後天的なものと考えた。これは、先にあり、タ・ヒュポケイメナ（素材）に形を与えたものとは何かについて的確に考えた結果得られた答えである

たとえば工芸品の上にある形相のうち、「寝台」の形相を後天的なものであると考えて、形相のうちのあるものはテクネー（技術）が、他のものは工匠が寝台に与えたものであり、また、技術はプシュケー（魂）の内にそのロゴイ（諸原理）を見出したものであり、さらにその魂は自らの内にではなく、他の何ものかの内に（その諸原理を見出したものである）ことを発見したのである

しかし、これ以上先に進んではならない。さもないと、アルカイ（始原）の始原を無限に求め続けることになる

同様に、自然物の上にある形相についても、あるものはフュシス（自然）が直接形づくり、他のものは魂が自然に原理を与えて、また他のものはヌース（知性）が最初に魂に形相のアフォルマイ（起源）を与えて形づくったものである

すなわち、物体の上にある形相は、ノエートス（思惟的）な形相そのものとは違って後天的なものであり、他のものから出て物体に与えられるものである

それゆえに物体はエウモルフィア（美形）へと、そして最後にはト・アネイデオン（無形）へと変化する

物体にあるのは、純粋な形相ではない。純粋な形相ならばそれは変容せず、反対のものへも変化しないはずだからである

しかし、魂も他の何ものも形相そのものではない。もしそうであれば魂はすべて静止したものであり、変化しないものであるはずなのに、魂の中には非知性的なものへと変化するものがあるのをわれわれは見るからである

したがって、不変かつ最も純粋な形相は、これを超えた他のものである

これ、すなわち非質料的・制作者的知性とはいったい何なのだろうか

知性には二種類のものがあり、その一つは魂の形相に相当し、これを永遠の昔から形づくっているものである

もう一方は、完全に他のものから分離しており、他のもろもろの知性を超越しているものである

それは、ウーシア（本性）においてもエネルゲイア（働き）においても同様に純粋な知性であり、善の戸口にあり、それ自体がト・ノエートン・カロス（思惟的美）である

したがってこの知性こそタ・プロータ（最初のものたち）であると同時に、それらを超えた他のものにあらずして、最初にそれらをエノエーセン（考えた）ものである

そして、イデアとはそのものの最初の思考であり、タ・オンタ（諸存在）の純粋なヒュパルクセイス（実体）である

そして、知性がホ・プロートス・エンテュメーティス（最初の考え出されたもの）であるように、これらはあるべきしてあるエンテュメーマタ（思考）である

フュシスは本性と訳す場合が多いが、自然と訳すのは誤解を招くのではないか?

それらは自らによってあるものであり、他のものどもから生じたものではない

これに対して、第二第三次の形相は、それらによって形づくられ、刻印されたものである

ある意味では、諸存在とイデアは同じものである。なぜなら、そこ（諸存在）に与えられたイデアは、第一義的にあるものそのものであり、あるべくして、そして原型としてあるもの、すなわちデーミウルギケー（制作的）イデアだからである

諸存在はイデアのうちの最初のものであると思われる

われわれは、これらを分類し、思惟的なものの作成を通して善から出て知性の許にあるものとして提示する

タ・アイステータ（感覚されるもの）は、ある形相への分有によって、それぞれがそう呼ばれているところのものとなるのであり、その際、その下にあるフュシス（本性）が外部からモルフェー（形）を受けたのである

そして技術はエイドローン（映像）を通してそれらに入っていくものであり、技術自体は、物質の外にあって、同一性の内にとどまり、真正の像を（自己のうちに）保有しているのである

知性は諸存在そのものであり、すべてを自己の内に、ただし場所的にではなく、自己自身でもっている

そこでは、「すべてがいっしょ」（ὁμοῦ πάντα）であり、それにもかかわらず判然と区別され、そして、それぞれが固有のデュナミス（力）であるという意味において、すべてがいっしょではない。種子のデュナメイス（諸能力）もここでの論議に比喩を提供する

というのも、（一つの種子）全体の内には、すべてが未分のまあ、あたかも一つの点にあるからである

魂は、もたないがゆえに把握し、獲得し、追い求めるが、知性は、「すべてがいっしょ」であって、自己の内にとどまっているのである

そして、知性全体は諸形相の全体であり、個々の形相は個々の知性である

それは、あたかも学問全体が諸定理の全体であり、そして各定理はその学全体の一部だが、場所的に分断されているのではなく、各部分が全体の中で力を発揮するのと同様である

諸存在は知覚する知性（νοῦς νοῶν）の内に置かなければならないため、ト・オン（存在物）を知性より先に考えなければならない

そして、両者の働きは一つである。分割する知性は別のものである。分割されえず分割することもない知性はト・ヘン（一者）であり、タ・パンタ（すべて）である

この知性の内にこそ原型があるとし、この知性をコスモス・ノエートス（思惟的世界）、すなわちト・ホラトン（可視的なもの）のパラディグマ（規範）として把握しなければならない

というのも、ある生物の原理があり、またこのロゴス・スペルマティコス（種子的原理）を受け取るヒュレー（素材）がある場合には、その生物が生まれることが必然であるが

同様に、思惟的な万能のフュシス（本性）があって、何ものもこれを妨げることが無い場合、一方が（世界として）形成され（κοσμηθῆναι）、他方がこれを形成する（κοσμῆσαι）のが必然である

そして、形成されたものの方は、ここでは人間を、あそこでは太陽をというふうに、形相を分割された状態で保有するが、他方のものは、すべて（の）ものを一つのものとして（もっているのである）

校正ミス?

ト・アイステートン（感覚されるもの）の内に形相としてあるものは皆、かしこから来たものであり、そうでないものはかしこから来たのではない

かの世界には、この世界の時間の代わりに永遠があり、そこにあるもののとれを取り上げようと、それはウーシア（実体）である

そして、そこには悪のロゴス（原理）はない。なぜなら、この世界にある悪は欠乏と欠如と不足から生じるものだからである

また、模倣的技術の規範はそこにはない。物を作成する（技術）はシュンメトリア（均衡）を応用する限りにおいてはそのアルカイ（原理）をかの世界から得ると言えよう

かしこには普遍的なもののみの形相があり、個々の相違は質料に起因する。

そして、ここにエイドーラ（映像）としてあるすべてのものに原型があると考えるべきではない

以上がプラトン的イデアについての考察である。